静岡市
林　範夫さん
坂巻道子さん

よい仕事、よい結婚が
私の人生の幸せだと思っています

御夫婦で弁護士事務所を開いている坂巻道子さん、林範夫さんは結婚して六年。職場での緊張感と家庭でのくつろいだ時が心地よいバランスを保っています。

山梨出身の範夫さんと東京出身の道子さんは、司法試験を受けるための予備校で知り合いました。男性が圧倒的に多い法律の世界のなかで、道子さんは範夫さんを「非常に信頼のできる人」として選びました。そして、今もそのイメージは変わることはありません。

結婚により、ひとりの人に人生のすべてをまかせるのは、道子さんにとってあまりに大きな賭けでした。経済的自立を考えると、資格は絶対に必要なものであったと言います。道子さんは結婚後も、仕事上では旧姓である坂巻姓を名乗っています。戸籍上では林姓ですが、弁護士の世界では結婚前の姓を通称として使うことが慣習的に認められています。「林さんの奥さんでは個人の意見をかわしていくにもネックになってしまう。意識的に対等な形で仕事をしていくのにも、夫婦別姓は役立っているし必要です」と道子さん。

「弁護士は自由業であり、独立した存在であるけれど、反面、孤独感もあります。そんな時、すべての面で味方である人がいるのは心強いものです。」とおふたり。もっとも、家庭にまで仕事を持ちこんでしまい、知らず知らずのうちにストレスがたまってしまうこともあるとか。

そんな時には、ふたりで旅をするそうです。ゆったりと温泉につかるのが好き。また、仏像の好きなおふたりは、京都にもたびたび足を運ぶそうです。ちなみに、範夫さんはお寺の息子さんなので、そちらの方面には詳しいとのこと。

結婚した時から、「子供を持つよりも仕事をしていきたい」と考えていたおふたりにとって、子供のいない今の生活はほぼ思い描いていた生活のようです。「夫婦であっても、お互いに孤独に耐えられる用意が必要だと思う。共通の部分と別々の部分とをしっかり認識して、個々としても独立しているか否かが問題です。子供のいない分、より純粋な関係かもしれません」と範夫さん。

静岡には、範夫さんが静大出身の縁で住むようになったとのこと。「静岡は全国的にみても住みやすい街なのでは。けれども、大人の男と女が共に楽しむ文化がないのが残念ですね」と。

「外で緊張を必要とする職業だけに、家庭では少しは子供っぽく馬鹿にならないと」と語る道子さんは、家庭では御主人を〝範ちゃん〟と呼ぶこともあるとか。「お互いに共有する時間をいかに多くとるか、最大に努力しなければ・・いつも向かい合って話すようにしています」と円満のコツを教えてくださいました。

龍山村
金指　歳さん
金指睦子さん

自然の暮らしが好き……

春の訪れを感じさせる、暖かな一月下旬。私たちは龍山村のキャンプ場をたずねました。抜けるような青空。まあるくとり囲んでいる杉木立。風光明媚という言葉ぴったりの、ここ龍山村青少年旅行村は、龍山村の通りから奥へ奥へと川沿いに車で十五分。白倉狭のそのまた奥に位置しています。

金指さん夫妻は、約三十頭の羊と三人の子供たちとともに、昨年四月からここで暮らし始めました。標高約六百メートル。冬は寒さも厳しく、今年はもう三回の積雪を経験しています。でも、子供たちも睦子さんも、ここの生活がとても気に入っています。

歳さんは、幼い時から動物が好きでした。学校を卒業すると北海道に渡り、七年間牧場で勉強して貯金をし、とうとう念願かなって小さな牧場を手に入れました。ところが四十八年の第一次石油ショックの為経営不振。帰郷せざるを得なくなりました。

その後、伊豆の大仁で家畜育成公社の仕事を得て、その頃知り合った睦子さんと結婚。五十六年、お父さんの逝去とともに故郷天竜市に戻り、現在の羊とキャンプ場での仕事が始まりました。

歳さんのぽつりぽつりと話す言葉に、睦子さんが時々相づちを打つ。話しながら、家の仕事をてきぱきとこなす睦子さんは、歳さんの夢を大切にしながら生活をしっかりと守っている――そんなふうに感じさせます。

二人は共通の趣味を持っています。結婚した当時暮らしていた大仁から、二人で沼津の教室に通い、身につけたレザークラフトです。

「今は子供が小さいので中断しているのですが、すごく楽しいんです。私が図案を書き、主人が皮をたたき出してとじるんです。主人の作業の早いこと。私にはとてもかないません。」という睦子さんの目は、キラキラ輝いていました。

「分担作業で、女房がいいとこばかり。図案に、仕上げに、色塗り。俺は力仕事ばっかりだよ。」

歳さんは、又、刈り取った羊の毛を使って、はた織りを始めました。羊の毛は洗って干し、染色。毛足をそろえて糸車にかけ、それを織機で織っていきます。すべてが手作業。染色も、周囲の野山にあるブタクサ、ケヤキの皮、サトイモの茎…ありとあらゆるものを使っての草木染めです。織り方も、週一度、浜松の織り屋さんに習いに通うほどの凝りようで、

「今はマフラーを二十本位編みましたが、自分の着る物を自分で手作りするのが夢です。」とのこと。

睦子さんは羊の毛をそのまま使い、フワフワした可愛い羊の人形を作っています。

朴とつとした歳さんと、しっかり者の睦子さん。山を愛し動物を愛し、自然に囲まれた生活の中で、一つの趣味を大切にして、言葉に表さない愛情を静かに育んでいるようです。

ウーマン スクランブル

…ちょっとお耳を拝借いたします…

――“住めば都”というけれど――
他県から来た方の 静岡 の印象は？

恵まれた自然の中で（埼玉より）

温暖のため、「自然に恵まれた裕福な県」という印象です。そのあり余る資産をどう使っていくか迷っているように見えます。他県からの転入者が多い静岡は、簡単に受け入れてくれます。ということは、郷土意識が弱いからかもしれません。そういえば、「県歌」を聞いたことがないですね。

（30代　女性）

やさしさに涙…（北九州より）

最初に驚いたことは、無人販売が成り立っていることでした。そして、道を尋ねた時、とても親切でやさしくて、涙が出る思いでした。人の気持ちにゆとりを感じるんです。のんびりしているので、私達も生活していて疲れないのです。

（50代　女性）

もっとゆとりを…（東京より）

派手さがなく、足が地についていてたくましさを感じた。お母さんに専念している人が多く、遊びやゆとりが少ないと思う。

（40代　女性）

物価が高い（高松より）

転勤族なので、今までに六ヶ所移転をした。その中で一番物価が高い。きっと大型スーパーがないからね。それから、道路が狭くて、一方通行も多い。自転車に乗っている人のマナーの悪さも気になるわね。でも、観光的には、沢山良い所があるし、何といっても、富士山を、毎日見て暮らせることは、幸福だなあと思う。将来の子供のことを考えると東京がいいわ。

（30代　女性）

県内でも違いが（岩手より）

中部と西部と東部・都市部と郡部との差が激しい。都市部では、生活も考え方もかなり近代的であり、田舎の方は、まだまだ、昔風の生活や考え方が根強く残っている。

（40代　女性）

恵まれすぎ……（長野より）

暖かくて、住みやすくて、海も山もあり、自然にも恵まれていていい。でも、恵まれすぎていて、それ以上を求めようとしないところがある。

（30代　男性）

刺激が少ない？（神奈川より）

文化的刺激が少ない街。地理的にも文化の谷間みたい。

（20代　男性）

生活の基盤を…（名古屋より）

最初の勤務地は、名古屋とばかり思っていたので、かなりショックを受けました。仕事の面で、競争の厳しい東京や名古屋で切磋琢磨され、より大きなやりがいのある仕事にチャレンジできたらと、夢を描いていたからです。住めば都、生活の場として気候温暖な静岡県は、大変魅力的です。人間的にも温厚な方々が多いと思います。将来、ここに生活の基盤を築きたいと考えています。

（20代　男性）

第二の故郷（秋田より）

もう三十四年。結婚、出産、そして我が家の新築と、人生の大きな節目は、すべて静岡で乗り越えてきました。ここは、私の第二の故郷です。第一印象は、秋田より風が強くて寒い所だなあと思ったことです。若い時の苦労も、今では、夫と二人の楽しい思い出となりました。年々、町の人たちとのおつき合いも深まり、旅をしたり、スポーツをしたり…。もう、静岡を離れることは考えられないです。

（50代　女性）

教育に関して熱心（横浜より）

教育に関して、親が熱心だと思う。もっと子供を自由に育てたい。それから、田舎に住んでいるせいか、「よそ者」と「土地の人」との区別があるように感じるけど…。

（30代　女性）

ディズニーランドが近い（鳥取より）

日本の中心で、どこに行くにも交通の便が良くて動き易いのが、うれしい。日帰りで、ディズニーランドに行けるので、子供は大喜び。でも、静岡の人はあまり外に出掛けないようね。もったいない。ファッションは、思ったより地味。

（30代　女性）

温厚な人柄は気候のせい（北海道より）

物価が高くても値切ったりしないことから、温厚な感じを受ける。気候が温暖で厳しさがないことがのんびりした性格にもつながるのかしら…。そのため、がむしゃらな面がないように思う。

（40代　女性）

富士山はいい!!（広島より）

大型スーパーが身近にないことは、日常不便。でも、何げない風景に富士山がポッと……。感激！

（40代　女性）

生活しにくい？（山口より）

地方なのに物価が高い。それに道路整備が悪いので生活しにくい面がある。でも、リゾート地としては、最適である。

（20代　女性）

消極的すぎる？（東京より）

女性が消極的すぎる。言いたいことがあっても言えない女性が多いようだ。そして、個性ないわね。

（30代　女性）

言葉が強い？（三重より）

のん気な人が多い。言葉の使い方が乱暴で強い。気候は、暖かいと思っていたが、風が強いので、雪国より寒く感じた。

（30代　女性）

商売の面は（山梨より）

気候が温暖なせいかのんびりしている。仕事に対して意欲がない。商売の仕方も、もう少し勉強してみたら？

（20代　男性）

静岡に六十年

こんなに住みやすい所は他に無い。気候も温暖で、自然に恵まれていて……離れられない。他の土地に住むなんて考えられない。静岡が一番。静岡に住む人が一番。

（60代　女性）

静岡の良さを再確認

静岡に生まれ育って七十年。住んでいると良いところもわからないものです。でも、この年になって、他県の方々と話したり、全国に出張したりすると、静岡の良さを耳にします。「気候が温暖でいいですね。」「交通の便が良くて、東京が近くていいですね。」「富士山を見られ、伊豆に行けば温泉郷だし、自然に恵まれていいですね。」と。確かに、静岡は、みかん、お茶等の産物もあり、駿河湾、浜名湖の海の幸にも恵まれています。今になって、住みよい静岡を再確認しています。

（70代　男性）

婦人の地位の向上、社会の発展、豊かな静岡県を目指して、あなたの一歩を踏み出そう!!

静岡県婦人課では、婦人の社会参加のための各種セミナー、講座を開催しています。今回は、「現代社会と女性セミナー」「婦人問題通信講座」「婦人の海外研修」に参加されました３人の方々の体験談及び感想文をご紹介いたします。
あなたも参加してみませんか。仲間との出会い、新しい知識を得て、あなたは視野を広め、今までと違った自分を発見することでしょう。「これまでの自分」から「これからの自分」へ。あしたに向かって、チャレンジしてみましょう。

「現代社会と女性」セミナーに参加して

望月　千紗子

〝男性と共に考える女性学〟と銘打った四つの講義を拝聴させていただき、大変勉強になりました。

まず、女性解放運動から派生的に、女性学が誕生して二十年、先駆的立場で、ずっと私たち女性に意識改革を迫り、また、女性の地位向上のため、戦い続けてくださる今回の講師の先生方はじめ、多くの方々に感謝いたします。

女性学とは、男性の価値感のみで考えられてきた科学、文学、芸術等を、女性の視点から見直す学問であり、男女不平等の根元は、この世に生を受けて以来の「男らしく」「女らしく」と決めつけられた、家庭、学校、社会と、一貫した教育にあること等、歴史をとおして教えていただきました。

社会が今、労働力として、又、大量消費時代の消費者として、おおいに女性を必要としています。この好機に、女性は男性と互していくため、学力を高め、経済的政治的にも進出し、従来のように、男性が決めて女性が参加するのでなく、女性も参画し、決定に加わりそして行動に責任を持ちましょう。そういう意識改革や、甘えからの脱却が必要だと思います。

しかし、女性が社会に進出し続けるために家事、育児、介護に対して、自治体も企業ももっと幅広い施策を構じてほしいと思います。家庭にあっても、男性の協力が絶対必要です。男女は車の両輪、どちらに歪みがあっても、まっすぐ走れませんから。

女性学に対して、近頃男性学も生まれたと聞きました。男女共同参加型社会をめざして、一歩二歩と前進して次の世代にバトンタッチできたらと思います。私も、その一端を担っているのだと、思いを新たにいたしました。

今後もこのセミナーが続くように、もっと多くの人に経験していただけるように願っております。そしてテーマのように、静岡の女性が皆、輝いていてほしいと願ってやみません。

「婦人問題通信講座」を受けて

太田京子

友人から、「婦人問題の通信講座を受けてみない。月に一度のレポートでいいの。」とすすめられ、軽い気持ちで受講することにしました。

テキストが届き、張り詰めた気持ちで読み始めていったら、内容がかなり専門的で、むずかしくて投げ出したくなるような気持ちになりました。いっしょに始めた友人達に話したところ、私と同じ気持ちでいました。

でも、なんとか書いてみようと、お互いに励まし合って、再びテキストを開き、ペンを取りました。

専業主婦の私には、自立する女性問題などかけはなれた事としか受けとめられなかったのですが、勉強していくうちに、身近な子育ての問題にも大きく影響している事に気づきました。親として重大な責務を感じた次第です。

また、いずれ訪れる老後・高齢者問題も、自分の問題として、今から考えていかなければならないと、切実に感じました。

生きがいは自立の上に成りたつもの。今後生きがいを持って生活していく事が、どんなに大切かという事を真剣に考えさせられた講座でした。

「婦人の海外研修」に参加して

大平展子

県婦人課の事業である海外研修も、九回目を数えた。この事業は、県内各地より推薦応募した中から選考された婦人が、海外研修を通して、資質の向上と地域づくりに役立てようというものである。今回参加した二十三名もそれぞれの地域で活躍されている人達だが、様々な事情を持ちながらも、家庭・地域・職場から温かい理解や協力があっての参加であった。それだけに研修中はもとより、事前・事後研修・啓発活動への取り組みは極めて意欲的であった。研修内容は、アメリカ・カナダにおいて、福祉・教育・文化・婦人等に関する施設への訪問と会談及び二度にわたるホームステイであった。

ある参加者は「十六日間の海外研修は、私の中の何かを変えたように思います。人との出会いが嬉しくて、がんばっています。」と感想をのべているように、参加者ひとりびとりに貴重な体験となった。この成果が各地に生かされ、発展していくことを確信している。